



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

2018年度ゼミ活動報告（学会記事）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159240

2018年度 ゼミ活動報告

ヨーロッパ地域ゼミ

佐藤 優佳

2018年度のヨーロッパ地誌ゼミは、加賀美雅弘先生ご指導のもと、K類欧米研究とE類多文化共生教育、A類社会科専攻・選修の学生、さらに総合教育開発専攻の大学院生のあわせて10名をゼミ生とし、毎週木曜日3限および4限に留学生センター長室で活動しました。また個人研究員の三原昌己先生も参加くださり、貴重なアドバイスをいただきました。主にゼミ生各自の興味のある分野をはじめ、卒業論文やプレ卒論の構想や中間発表を行い、多くの議論を重ねていくことで興味ある分野についての知見を深め、研究への意欲を高めました。

毎年恒例の活動である年2回(夏と冬)の日帰り巡検も実施しました。夏の巡検は加賀美先生の計画の元、「墨田区・木下川の皮革産業地区で差別を考える」をテーマに東墨田会館にある「資料館きねがわ」を見学し、皮なめしの工程や部落差別について学びました。そして産業についての学習が学校でなされていないことと、差別問題との関連性について考えました。また冬の巡検では3年生が計画を立て、「横浜における外国人の記憶をたどる」をテーマに横浜市内にある英連邦戦死者墓地を訪れ、それが設置された経緯やその時代背景を考えました。さらに、横浜市街地において外国人遺留地の特色を理解するために、かつてあった日本人町や山下居留地の跡地を歩きました。現在の横浜中華街にも足を延ばし、観察しました。横浜という都市の特異性を学び、外国人の記憶をたどることができた巡検でした。

以上のような活動のほか、2018年度にはポーランドやフランス、ドイツでの留学を終えたゼミ生による留学体験発表会も行いました。これは現地で最新の現地情報や日本との違いを知る機会になり、多くの刺激を得ることができました。またヨーロッパ地誌ゼミの縦コンも開かれ、OB・OGの方々との交流がなされました。このように親睦を深めながら活発な意見交換や議論を深めるのが本ゼミの特徴であり、中身の濃い活動が行われました。

ヨーロッパ地誌ゼミでは、様々な研究分野に興味を持った学生が所属し、ヨーロッパに限らず、世界各地に目を向けながら多文化共生や地域問題、社会の変化などについて考察しています。今後もゼミ活動を通じて学びを深め、一人一人の研究を進めていきたいと思います。

文化地理ゼミ

石橋 嶺

2018年度文化地理ゼミは椿真智子先生のご指導のもと、大学院生7名、学部生15名、留学生2名で毎週木曜日18時から地理学演習室で行いました。おもな活動としては、大学院生の副論・修論や学部生の卒論・臨地研究に関する発表と発表内容に関する議論を中心に、メンバーの留学・旅行体験の紹介なども行いました。3月には有志参加者により「カイロ巡検」と「川越巡検」を行いました。このような長期休暇を利用した巡検では、普段経験できない特別な学びがあります。カイロ巡検では、イスラーム圏の日常生活の場や学校訪問等を通して、相対的視点から

世界をとらえる体験をし、風土に根差した生活文化や歴史、人びとについて見識を深めました。こうした積極的な国内外への興味は、ゼミ生の行動にも現れており、2018年度は台湾やタンザニア、スウェーデンへの留学生を輩出しています。また、広く多様な文化を受け入れる姿勢から、多数の留学生がゼミに参加し、一緒に活動する素地も築かれています。次に川越巡検では、東京近郊の人気のある観光地の側面とその土地に根づく問題について学びました。学部3年生が主導して企画し、川越出身の院生が主に案内を行いました。

このようにゼミ生が中心となって積極的に学びを深めることで、各自の意見や考えを自己表現し、多くのメンバーがそれについて活発に議論や共有していくプロセスが随所でみられます。文化地理ゼミは比較的人数が多いため、多様な研究テーマやフィールドについてお互い学びあうことのできる点が最大の特徴です。

2018年度も扱われたテーマは多岐にわたり、「文化に関すること」を軸に、観光やエスニック、宗教、生活行動、伝統文化、地域イメージ、若者文化、まちづくりなどをキーワードとした研究が行われました。地理学の中では相対的に新しい分野の研究も多く、チャレンジングな研究に挑戦しているゼミ生も数多くいます。今後も広義の「文化」や人びとの認識や価値観をテーマに、ゼミ生一同努力していきたいと思えます。

地形ゼミ

川島 愛

2018年度の地形ゼミは学部4年生2名、学部3年生2名、合わせて4名のメンバーで青木

先生のご指導のもと毎週木曜日（または金曜日）18時から地理学演習室（または地形学実験室）で活動しました。

2018年度は4年生の卒業研究の構想発表・中間発表・最終発表、3年生の臨地研究の構想発表・中間発表・最終発表を行い、お互いに意見を出し合ったり、青木先生のアドバイスをいただいたりと、それぞれの活動において理解・考察を深めていくことができました。

地形ゼミでは各自が様々な地形・事象を対象にして調査研究を行っています。過去には、砂浜や礫浜、岩石海岸、サンゴ礁海岸などの海岸地形、滝など山地河川、津波で打ち上げられた津波石、新旧地形図を用いた災害に対する脆弱性に関する教材開発をテーマにした研究を行っています。2018年度の研究テーマを挙げると、砂嘴地形で有名な伊豆半島大瀬崎における沿岸流による礫浜堆積物の粒径と円形度の空間的変化、海食崖の後退に与える風化作用の影響について、岩石海岸における海岸線の形状と岩石強度との関係、千葉県養老川・小櫃川流域に発達する滝壺の深さについての野外調査を行いました。

また、各自の研究テーマにおいて現地観測を複数回行うため、ゼミのメンバーみんなで協力し合い、それぞれの調査や計測を手伝うことで様々な現地調査を経験することができます。自分の研究対象としていない地形についても理解を深め、地形に関する興味・関心を高めることができます。さらには何を探究していきたいのか、ということをも他のメンバーの調査を通して見つめなおすこともでき、次の各自の研究につながる活動ができました。

地形ゼミでは、各自が興味・関心をもった地形についてゼミのメンバーと協力し合いながら研究を進めていき、調査結果や考察について各自の意見を出し合って議論を重ねていくことで、より深く地形について理解し、さらに現象の本質を明らかにするための科学的な見方・考え方を学ぶことができます。

都市地理ゼミ

磯部 翔

2018年度の都市地理ゼミは牛垣先生のご指導のもと、主に大学院生1名、学部4年生4名、3年生9名、2年生1名の計15名で毎週火曜日18時から地理学演習室にて活動を行いました。

2018年度は主に学部4年生の卒業研究や3年生の臨地研究に関する発表を中心に活動を行いました。また、研究に関する発表以外にも、各自が興味関心のある事項を自由に発表することができる機会を設けました。さらに、興味・関心のある地域に実際に赴き、実際にその地域の雰囲気や特徴をつかむ巡検を行いました。

7月末には、目白～池袋で巡検を行い、池袋に近づくにつれて変化する都市景観や機能について学びました。8月には、学部3年生の臨地研究対象地域である千葉県木更津市に事前調査で赴き、本調査に向けての準備を行いました。2月下旬には、学部生の発案で大宮巡検を行い、鉄道の歴史や新都心への移り変わりなどを学びました。

都市地理ゼミの特徴として、扱うテーマの幅広さがあります。「都市に関すること」を中心に商業や観光、交通、行政財など各自の興味・関心のあるテーマを研究することができます。また、他学生の研究発表を聞き、そのテーマについて議論

を重ねることにより、多くの観点から地理学を考えることのできる場となっています。さらに、牛垣先生の専門分野である商業地理分野については、専門的な知識や解説を頂くことができ、より深い研究を目指すことができます。他にも、研究発表以外に、自由に発表ができる場を設けることや学期末に慰労会を開催することでゼミ生同士の親睦を深め、意見交流や議論の行いやすい環境をつくることができました。

今後とも、牛垣先生の丁寧なご指導のもと、ゼミ生が多くの活動や議論を通して、地理学に関する学びを深めていけるように努力していきたいと思えます。

気候ゼミ

高橋 萌

2018年度の気候ゼミは、澤田康徳先生のご指導のもと、院生2名（社会科教育専攻）、学部4年生2名（B類社会、A類環境教育）、3年生2名（A類環境教育）の計6名をメンバーとし、毎週火曜日18時から地理学実習室で活動しました。ゼミにおいては、3年生の論文紹介、4年生の卒業論文構想発表、中間発表、大学院生の修士論文・副論文中間発表を中心に行いました。

それぞれのもつ研究テーマは幅広く、東京都における水害と降水特性、中部山岳域の局地低気圧分布と気候要素、熱中症と気候、降水認識と情報獲得、降雨による大気汚染物質除去など自分のもつテーマでない分野においても意見しあひ議論を進めることができました。

また、2017年度のゼミ合宿で訪れた千葉県銚子市の気候誌調査を終え、調査結果を論文として執筆し、大学紀要に寄稿することができました。

役割を分担して調査結果を整理することで、銚子市の気候や風土について理解を深めるだけでなく改めて調査の方法や、データのまとめ方について学習する有益な機会となりました。

今後も気候ゼミの良さを活かし、各自の学習・研究をすすめ、ゼミ生全員で議論し、共有することでゼミの学びの質の向上を目指すとともに、環境教育・地理教育に貢献していきたいと考えています。

地域生態ゼミ

本木 惇太

2018年度の地域生態ゼミは、中村康子先生のご指導のもと、週に一度、木曜日18時から地理学標本室（中村先生研究室）にて活動しました。ゼミ生は、学部4年生2名、学部3年生5名の計7名でした。

春学期の活動は、論文紹介や各研究の構想発表・中間発表を中心に行いました。秋学期の活動は、春学期に引き続き、各研究の発表や論文の体裁チェック、卒論発表会のリハーサルを行いました。各研究内容は、成熟期の都市農業、廃校跡地の利用と地域コミュニティの果たす役割、のり養殖業の特徴とその課題、農産物生産・販売における地名表示の役割、農村空間の

商品化、谷地田の特徴と耕作放棄の実態、地上設置型太陽光発電施設の立地とその背景、など多岐にわたり、幅広い分野への関心が高まりました。1年間のゼミ活動では、特に事象について、即時的な理解につながる図表作りを目指し、図表を中心として、論を展開していくことに意識を置きました。

夏季休業中には、臨地研究の事前調査を兼ねて、千葉県木更津市において巡検を行いました。現地調査や市役所・農協・漁協での情報収集、直売所・道の駅訪問を実施しました。私達学部3年生は、中村先生や先輩方から実践的なアドバイスをいただき、ゼミ生一体となって、深い議論を交わすことができました。また、道の駅の見学やマザー牧場訪問では、木更津市の特徴や自然環境、観光施設について学ぶことができました。事前調査で、その地域の実態を知ることができたからこそ、臨地研究の本調査はより実りのあるものになったと考えています。

地域生態ゼミでは、毎週様々な角度から議論を行い、1人ひとりが強い研究意識をもつ中で、ゼミ合宿の企画・実施をしています。今後も様々な活動を通して、ゼミ生1人ひとりがより良い研究ができるよう努めて参ります。